

【音楽科】教科提案

「比べる」ことでせまる音楽の魅力 ～思いや意図をもって表現できる子どもに～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

音楽科ではこれまで5か年にわたって「比べる」をキーワードに、小グループにおける「協同的な学び」の実践・実証を重ねてきた。質の高い「ジャンプある学び」成立の要件として、目標設定をはじめ教材選択や課題設定の良否が挙げられた。また、繰り返される旋律やさまざまな反復のかたちなど、音楽的な要素や音楽の仕組みに注目することで子どもの学びの質が高まっていくことも確かめられた。

本年度は学校提案「学びをデザインする子どもたち」を受けて、音楽科では「比べる」をキーワードに、生涯にわたる音楽的な「自己教育力」の育成につながる要件を明らかにするとともに、「思いや意図をもって表現できる子ども」をめざしたいと考える。

今年度の学校提案「学びをデザインする子どもたち」及び重点目標「課題意識の深化を通して」については、次の4つのことから達成できるようにしたい。

- ・学習過程「ひらく→しめす→わかる→できる（開・示・悟・入）」を用意して、子どもの心理的基盤を大切に、聴き合い、学び合う「学級風土」づくりを行うとともに、子どもの育ちが見える題材構成・評価計画を心がける。
- ・学年に応じて子どもが使える音楽的言語・用語の層を厚くする。
- ・「比べる」活動を用意することで、対象や他者、あるいは自己との多様な対話をつくる。
- ・「言葉の吟味、考えの吟味」（秋田 2009）が、言語活動を通して価値観形成へと至る過程で、表現領域の活動にも繋げられるようにする。

①音楽科における協同的な学び

音楽科における協同的な学びは、それぞれの子どもの感じたことをペアやグループ、あるいは集団で共有するところから始まると考える。感じたことを言葉で伝えられる場合もあれば、実際の歌う・演奏する・つくる・聴き合う活動を通して伝えることもあるだろう。さらに、歌詞や楽譜などの対象や既習内容の中に理由や根拠を見つけて吟味していくのが、協同的な学びだと捉えている。

②音楽科における「学ぶ筋道を考える」ためのポイント

ポイントの1つめは、「対象をしぼる」ことである。

全体をまるごとではなく、「このフレーズだけ」「この楽器の音色だけ」「このリズムだけ」というように対象をしぼって子どもたちに与える。集中するところを示すことにより、逆に全体がはっきりし、子どもたちの対象に対する世界が広がったり、深まったりすると考える。ただし、対象をしぼる条件として、教材での指導内容が含まれていることが必要だと考えている。

2つめは、「基礎・基本といわれる土台を定着する」ことである。

提示された課題に対して、自己の課題意識をもつためには基礎・基本が定着していることが大切である。歌い方を工夫するのであれば、声の出し方をわかっていること、リズムづくりをするのであれば、

音符や拍子などの意味を理解していることが必要である。こういった基礎・基本の土台を築くことで課題に対して前向きに取り組む姿勢を得られるのではないかと考える。既習内容を生かした順序立てたステップを積み重ねることにより、子どもたちが楽しく自然に基礎・基本の土台を身に付けるようにしていく。

3つめは、「比べる活動を取り入れる」ことである。

対象や自己との対話を促すための視点として、「比べる」活動を取り入れていく。同じ曲を長調と短調で聴き比べる・楽器の奏法の違いを生かした演奏を比べる・ワークシートなどの授業記録を活用して前時の自分の考えと本時の自分の考えの違いや深まりを比べる等々、子どもたちに意外性を与えるものを比べる対象として用意する。比べることで今までには気付かなかった新しい事実を発見したり、もっと深く考えたりできるようになる。一定のところまで止まっていた対象や自己との対話が「比べる」活動を取り入れることで活性化するのではないかと考える。

(2) 音楽科でめざす子どもの姿

「音楽が好きだ・歌いたい・演奏したい・作りたい・いろんな音楽を味わって聴きたい」さらに「仲間と一緒に歌ったり演奏したりしたい・仲間が好きな音楽にも興味がある・仲間の音楽表現にも興味がある・気持ちを込めて音楽を表現したい」子どもをめざす。

そのためには、音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability, capacity)」の3つがバランスよく身に付いていることが必要になるであろう*。そこで音楽科がめざす子どもの姿を次のようにした。
(*ここで言う「能力」とは、「思考力・判断力・表現力」の総称である。)

音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability, capacity)」
の3つが、音楽的関心・意欲・態度に支えられてバランスよく身に付いている子ども

上の3つを身に付けることで、自分に合った生活スタイルを見つけ、自分を音楽で豊かにし、生涯音楽の基盤を手に入れようとする子どもになっていくと考える。同時に工夫して音楽を表現したり、仲間とのかかわりからも自分の音楽的世界を広げていったりする子どもが育つと考えている。

2. 音楽科学習における「学びをデザインする子どもたち」

音楽科学習における「学びをデザインする子どもたち」とは、

- ①学習したことが使えるようになること ②学び続ける目標がもてること

であると考え。すなわち音楽の学習を通して基礎的・基本的な知識、技能を確実に身に付け、活用する力を育むとともに、目標感をもってさまざまな音楽とかかわりをもつことだと捉えている。

そこで下記〔共通事項〕(抄)に着目し、思いや意図をもって音楽を表現したり鑑賞したりするための基を築いていきたい。

- ・音楽を形づくっている要素を聴き取り、面白さ、美しさを感じ取ること
- ・身近な音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について音楽活動を通して理解すること

これらは、すぐに身に付くものではなく、定着するためには繰り返し指導を行う必要がある。加えて

具体的に「書く」および「ことば」または「からだ」で表す活動も必要となろう。グループで考える・表現するなどお互いに関わり合いながら学びをデザインする子どもたちを育てていきたい。

また、学び続ける目標をもつためには、達成感は欠かせないと考える。「こんなことができた」「表現を聴いてもらえた」と満足した気持ちになることが大切である。達成感を味わうことで、次の活動意欲へつなげていくことができる。ただ、思いや意図をもつことができたとしても、その通り表現できるかは別問題であることも多い。そこで1人では表現しきれない思いや意図をグループやみんなで表現してそれらを比べていくことで音楽の魅力にせまりたい。

(1) 音楽科において私たちが期待する「課題意識の深化」とは

音楽科における学年に応じた思考力・判断力・表現力の段階を次のように考えている。

(低学年) ペアを中心になかまの演奏や考え・思いに触れ、音楽やその演奏の楽しさを感じ取って学ぼうとしている。また、「おと」・「ことば」・「うごき」などで伝えようとしている。

(中学年) 多様な演奏に触れたり、自分となかまの考えや思い・感じ方を比べたりしながら、他者とともに音楽を形づくっている要素に気付いて学ぼうとしている。また、表現や鑑賞の活動を通して、工夫して伝えようとしている。

(高学年) 多様な演奏やなかまの考えや思い・感じ方に進んでかわり、他者の考えと自分の考えを融合させながら、音楽を形づくっている要素を理解して学ぼうとしている。また、表現や鑑賞の活動を通して、根拠をもって自分の感じ方を伝えようとしている。

(2) 音楽科における子どもへのみとりと支援

みとりについては、評価規準や評価計画の作成に尽きると考える。支援については教師と子どもの関係をまずつくり、子ども同士の関係づくりへと広げていく。①ICT機器の活用によって学習状況を把握しやすくする。②ワークシートの内容に工夫を凝らし考えや思いが的確に表現できるようにする。③長期的に子どもの学びをみとるために、書き込み状況を記録(コピー等)し、個人カルテとしていく。

(3) 事例：5年生の実践から <いろいろな音が重なり合うひびきを味わおう～鑑賞「双頭のわしの旗の下に」～> (2014/5/21 本時)

本時では、吹奏楽で演奏されている「双頭のわしの旗の下に」(J.F.ワグナー/作曲)を聴き、感じたことや気付いたことなどをなかまと伝え合いながら吹奏楽の響きを味わうことを目標として行った。

「学びをデザインする子どもたちの姿」をめざして、ペア活動を取り入れた。音直線が書かれてあるワークシートをペアに1枚配布し、ペアで気付いたことなどをそのワークシートに記入しながら鑑賞した。

【ペアで金管楽器の音色を聴き取りワークシートに記入後、どこの部分で聴こえたかを発表している場面】

あきお：前奏は金(金管楽器)で、Aの最初は金が小で、Bは金が大で、

木(木管楽器)が小で…

かずお：Bが金の大きで、木管楽器が小で、Cの最後らへんに金が中が入っている。

さくら：中ってなに？

かずお：中ぐらいの音っていうこと。



一人よりもペアで鑑賞することによって、細かい所にまで気付くなど、学びを深めていく子どもたちの様子が見られた。また、「金の大き」「金の中」など自分たちで言葉を作ってなかまと伝え合うことができた。

○事例2 4年生の実践から <拍の流れにのろう～音楽づくり「せんりつづくり」～> (2014/7/2 本時)

グループの発表を聴き、話し合う場面から

なつ：1番最初は私なんだけど、お話が始まるみたいと言われたから。最初はミなんだけど、だんだん上がっていく感じだから。

教師：終わりは。

なつ：終わりは高い音ばかりで、ミソソで終わっていき感じだから。

教師：もう一回聴いてみましょう。*グループのリコーダーで旋律演奏

はる：最後まで続きがある感じがする。

あき：高くしたらいいと思う。

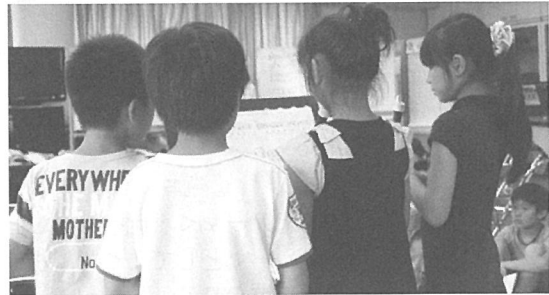
ふゆ：1番最後はソだったからドとかにかえたら。

こはる：最後のドを終わりと変えたらいいと思う。

教師：そしたら、変えてもう一回ふいてくれる？

*グループで再度リコーダー演奏 みんな：終わった感じ。

みんな：するする。



みんなで聴いた後、多くの子が旋律は続く感じがすると発言した。そこで再度、旋律を入れ替えたものをみんなで聴いた。このことで、自分たちで終わる感じや続く感じに気づき、次の旋律づくりに活かすことができている。子どもたち自身が聴いて感じたことを表現することで次への手立てを導いていた。

3. 研究の展望

音楽科では、子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けるために、「比べる」をキーワードに表現及び鑑賞の楽しい活動を通して、音楽の魅力にせまりたい。思いや意図をもって表現できる子どもを育てるために、以下の方法で楽しみながら学びをデザインする子どもたちをめざす。

- ① 表現と鑑賞の活動において、「比べる」学習の筋道を明らかにする。
- ② 音楽に対する考えや感じ方などを他者と比べたり共有し合ったりして、聴き取ったことや感じ取ったことなどを、学年の発達の段階に応じて表現し、伝え合う。

4. 研究の評価

- ① 「比べる」活動を行うことで子どもたちの学びの姿が変化した場面が見られた。(本紀要音楽科5年生実践から) その変化を表現にいかすことができた。
- ② 「比べる」活動を行うことで子どもたちが思いや意図をもって表現することにつながっていくことがわかった。
- ③ 演奏の聴取や楽譜などから事実を見つけ、その事実を根拠として「吟味」する音楽的な言語力の高まりから、すべての子どもたちの学びの深まりが見られた。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもたちが改善されたが、よりよい手立てを来年度も行っていきたいと考える。
- ④ 課題設定の工夫(教材設定の工夫、発問の工夫、課題プリントの使用や一覧表示)によって、すべての子どもたちの学びが変化した。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもの学びが改善されたかはまだまだ研究を進めていかなければならない。また学級の子どもの学びが、客観的に変化の様相を見せたといえたといえるが、それを何で一人一人みとっていくかということはいさら深めていくための今後の課題である。